

# 罪と罰

— アーサー・ミラーの『モーガン山を下る』 —

川 野 美 智 子

## 〔抄 録〕

76歳になったアーサー・ミラーは、この作品で放逸と過剰の80年代を巧みに風刺した。欲望の赴くまま何もものをも自己に拒むことのなかった主人公は、ふたりの女性に対して誠実であろうとして重婚の罪を犯す。それぞれの娘、息子にも優しい父であろうとし、そのために尚更、自分の行いが人道に悖るものであることに気づかない。愛人の元へ急ごうとして下山の途中事故を起こし、生死の境を彷徨う彼に、地底から蘇る父の黒い姿が再三訪れる。病室での激突の後妻達も親友も去った時、彼を包むものは厳しい孤独であった。ドラマは悲劇と茶番の間を往復し、観客は主人公の愚かさを嘲笑するかと思えば又運命の罠に落ちた彼の惨めさに涙する。しかし最後に示された主人公の前進への意志には、孤独に耐えて世界の救世主たらんとする80年代のアメリカの象徴が看取されるように思われる。

**キーワード** 家族、自己、愛、孤独、罪と罰

## (1)

二十世紀の最後の十年は、ミラーにとって栄光の中に幕を開いた。1990年10月、七十五回目の誕生日に合わせて、ビッグビー編集に成る『アーサー・ミラーとその仲間』<sup>(1)</sup> が刊行され、九十人に及ぶ俳優、デザイナー、監督、評論家、作家に囲まれたミラーの姿とその意見が躍如として描かれている。この中のインタビューは、1979年から89年に到る十年間に行われたものだが、この十年の後初めてミラーは、十分な長さの劇『モーガン山を下る』<sup>(2)</sup> を書いた。アメリカでなかったことがミラーにとっては遺憾なことではあったが、これはロンドンで大ヒットし、タイムやサンデータイムズの劇評欄でも大きく取り上げられた。<sup>(3)</sup>

少し皮肉な言い回しではあるが、「血、重婚、ビーポップ、猥褻」(blood, bigamy, bebop, bawdry) がミラーのいわゆる「ロンドンの繁栄せる劇場文化」に脚光をあてているとタイム紙は書き、その中心に『モーガン山を下る』が位置している、と結んでいる。これら四つのB

で始まる特徴付けは同じ時期ロンドンで評判となった四つの劇の特徴なのだが、熟考すればこの四つの言葉はミラーのこの作品の特徴を言い当ててもいと納得させられ、そんな外面の底を流れる芯の強いミラーらしさも、これまで以上に顕在していることに気付かざるを得ない。

ライマン・フェルトは50歳後半、今や保険業界に君臨する実業家である。雪のモーガン山を車で下る途中で事故を起こし、ニューヨーク州北部の病院に収容されている。その病院に呼ばれた二人の女は、いずれも自分が彼の妻であると信じて疑わない。黒人看護婦と友人である弁護士トムが入り出す病室が、まずドラマ設定の大枠である。

やがて二人の妻の鉢合わせを契機に、ライマンの過去が、また欲望があらわになる。その都度ライマンは病室に固定されたギブスを抜け出し、過去の場面に入り込む。その過去の場面にも、本妻シオドーラと娘ベッシーの場面と、愛人であり偽りの結婚をしたリアの場面が交錯する。さらにライマンの無意識に登場する黒い存在——父の姿がある。このように複雑な舞台設定にも関わらず劇はオープンスペースで上演され、各場面は家具、小道具と照明によってそれぞれ役目を配分されることで、観客は現在と過去、そして過去によって語られる人間関係をよく理解することができる。理解の容易さはセリフの妥当性からも来ることで、『転落の後で』以来の、それと同等の実験的な舞台構成でありながら、リアリズムの言語に支えられたリアリズムのドラマと呼んで差し支えないと思われる。トガキには、「劇は茶番から悲劇へ、またその逆へと方向を変える。」<sup>(4)</sup>とある。悲劇が基調のミラーの人生観に少しずつ余裕が出てきて、『世界の創造とその他の仕事』とそのミュージカル化された作品『楽園へ』が正面切ってコメディと銘打たれていたのを想起する。ここでは人生を茶番と達観する老成した劇作家の目が、それでもつまるところ悲劇的人生観にしか辿りつき得ないことにも思い到る。

事故による重傷のためギブスと繃帯に取り巻かれて半睡半醒の状態にあるライマンの意識を、「父」は三度訪れる。第一幕で二度、第二幕で一度苦しい眠りの中で見る悪夢である。二人の女が一応の和解を見せた後で、楽天的な男の身勝手さを示しながら、ライマンの内心の不安と恐怖と苦悶は父の出現で激しさを増す。パナマハットをかぶり杖を持ちパイプ煙草を吸う父の姿は、ミラー劇に付きまとうかたくなユダヤ商人である父親像だが、ここではいずれの場面とも後ろに幅広の黒い布を引きずっている。あるいは「死」の象徴だろうか。前の二つの場面では青年ライマンの意識に焼き付いた父であり、後の場ではもっと遡った意識の深いところにある腕白小僧のライマンを叱っている父である。息子と妻への失望、女にだらしない息子への戒め、そして共通するのは「商売には大変よろしくない」という金言であり、ビジネスの世界にあって父の主観を律する道徳律は、地底からのいんいんたる響きとなってライマンを脅す。

こんな深層心理を別として、ライマンは極めて楽天的でいい気な男に見える。解放された過剰の時代である80年代の意識を反映して、彼は何ごとにも自分に拒否することができない。自分は全てを持つべきだと単純に信じている男である。妻と愛人も、娘も息子も。落ち着いた家庭も情熱をたぎらせる不倫の愛も。そして二人の妻に対しているとき、ライマンはそれぞれ誠

実さを傾けて語っている。自分の家から数ブロックしか離れていないホテルに愛人と泊まり、散歩に出た寸暇に家で妻と愛を交わすなどという際どい芸当の際でさえも、である。そしてその折々に彼がひたすら願うのは、今日の前にいる相手の女性の幸福なのであった。

(2)

ライマンの病床に駆けつけた妻シオドーラは、長年連れ添った60歳になろうとするワスプの女性で、辛辣で気難しく、理想主義に凝り固まった、知性においても身体的にも強健な人であった。彼女には常に成人した娘ベシーがついている。シオドーラが守ろうとする妻の座は家庭の象徴だが、ベシーは普通の娘として父のために泣く。一方30歳位のユダヤ系の職業婦人リアは、ライマンの職場での付き合いから愛人となった。9年前に妻にすると言われて二人の間の息子ベンジャミンを産み、ライマンの正妻になったと信じ込んでいた。彼女たちがその身を案じて駆けつけてきた当の男がモーガン山を下るポルシェの事故で大怪我をし、リアが保険の仕事をしていること、ベシーの夫が少しは知られた画家であることなどを語り合ったあげく、ライマンの重婚の事実が明らかになる。

「重婚保険ってのはどうだい？ 遺棄防護プランといってもいい。」<sup>(6)</sup>などと不謹慎な言葉を友人の弁護士トムに語るライマンも、ふと本音を洩らすことがある。

「僕はいつも妻の現実感覚に頼ってきた。特にこの国に対する彼女の洞察に。しかしもう騙したくはない。その斯瞞は忌まわしくなった。僕のナチ、僕の最悪の恐怖にになった——僕は死ぬまで自分の顔を身に付けていたい」<sup>(6)</sup>

と言い、また、

「僕はいつも父のことを思う——なんと父は僕の一生に繋がっていることか。毎朝店を開けるのが待ち切れず、幸せそうにピクルズを数え、オリーブの樽を置き直す。ああいう人々は、だいたいなことは何かを知っていた」<sup>(7)</sup>

と言う。ここでも額に汗して働く普通の人々への憧憬に、ミラーは触れている。

ライマンの入院中の病室という現在の大枠のなかに遍在するのが、9年前という時である。リアがライマンに妊娠を告げたときライマンは有頂天になって未来の親馬鹿ぶりを述べ立てるが、リアとの24歳の年齢の差を考えると、最盛期のリアに背を向け日没に向かって歩いてゆく自分が見えてくる。それが残酷にも唯一のリアリティだと知りながら、病室のライマンはシオドーラとリアの二人の女を自分のベッドに並んで寝かせ、性愛のまねごとをリアに向かって仕掛ける。現実と経験の、現在形と現在完了形のできごとのおぞましい混在がここにある。観客にとってはシオドーラの怒りだけがリアルで、ライマンが終始一貫して示す男の身勝手は斯瞞と虚妄以外に何の感興も与えない。

次の場は9年前のリアによる妊娠告知よりも更に遡り、ライマンとリアの最初の出会いが描

かれる。明るい陽光の中を腕を組んで歩く二人は、公園のベンチに座るような仕種で語り合う。リアの経済的自立をセクシーだというライマンは、また辛辣な世論をもまきちらす。

「保険の基本はコミカルなものだよ。少なくとも悲壮なものだ。君は不能を買っているからだ。勘定を支払うため、人々に君の愛を思い出させるために墓から手を延ばしてね」<sup>(8)</sup>  
とか

「僕の年代は成熟を示すために結婚する。君の年代は同じ理由で独身でいるんだな」<sup>(9)</sup>  
などである。

ライマンは自分の生い立ちについてリアに語る。20歳になって詩を3編と物語1編が雑誌に売れたとき、その金で彼が買ったものは、自分が作家としてどんなにリアルであるかを父に印象づけるための立派な青い背広と中東の珍味などだった。父はそんな息子のことを心配して神に祈る。父は人を決して信用しない、そして決して許さないという二種類の知恵を持つアルバニア人だった。ライマンの母はユダヤ人だった。

「それが私の悩みの原因さ。ユダヤ人の心には法律家が判事が、アルバニア人の中にはナイフをもって政敵を脅す無頼漢が住んでいる」<sup>(10)</sup>  
ユダヤ娘リアに向ってライマンは言う。

「君の目のなかには何か神々しいところがある。古びたというんじゃなく——古来のものといったような。わが民族のように」<sup>(11)</sup>  
異人種渦巻くアメリカ社会の縮図が見てとれる。そしてそこから生まれる文化の軋轢や魂の悲劇もまた窺えるではないか。

誰かを愛するとき人はその対象をよく知りたいという欲求に駆られる。この思いを妻シオドーラに洩らして理解されなかったとき、おそらくライマンの心は決定的に妻から離反した。娘ベシーを含め三人の女たちと弁護士トム他にライマン自身の魂もベッドの上のギプスのライマンを見守る中で、ライマンの独白は続く。

「われわれは皆洞窟にいる・・・ここは暗い、眠りのように暗い。そして各々は盲目的に動いている。別のものを求めて、触ろうとして触ることを求め、そして恐れている。そして望み、恐れている・・・」<sup>(12)</sup>

これもまた、アメリカン・ライフの一つの現実である。この精神の昏さのなかで妻妾が争い相打つとき、男の内臓から迸り出るのは動物の叫びでしかない。第一幕の幕切れ、暗い舞台を覆うのは、ベッドに横たわったライマンの肉体からの人間ならぬ吠え声と呻きである。今や妻の耳には彼の苦悩の声は全く届かない。

テオ（静かに不思議そうに、トムに）「あの人はなんと言ったの？」<sup>(13)</sup>  
肉体が苦痛に苛まれ、生死の境を彷徨うと同時に、ライマンの精神は混迷の直中で立ち往生する。

(3)

第二幕に入ってもドラマの混迷は深まるばかりである。舞台は現在時制のまま、病院の待合室での弁護士トムと妻シオドーラの対話とそこに現れた愛人リアの、歯車の食い違ったままのぎくしゃくした遣り取りが少時続く。これに差し挟まれるのがシオドーラの夏の日の回想である。モントーク沖でヨットに乗っていたシオドーラはラジオの鯨注意報のため反対するライマンを振り切って海中に入ろうとするが、水中の魚の姿を認めたライマンの警告に救われる。しかしそのときのライマンの制止が精一杯でなかったことにシオドーラは深く傷つき、「あのひとはあるとき私を殺そうとしたの」<sup>46</sup>とさえトムに語る。トムもいうように、シオドーラの心のなかの愛憎の烈しい葛藤が、幸せだったはずの若い日々をさえ陰らせる。

病室でうなされながら眠るライマンの両側に寄り添う二人の女の様子を表現するトガキには、「墓場のような夢のような光が彼女らを照らし出すとき、その死のような沈黙には何か脅迫的なものがある」<sup>47</sup>と表現される。料理の話題をめぐるって和解したかに見える女たちが退場すると、ライマンは再び恐怖に喘ぎ、亡霊に似た父の叱責を地底から反響する地獄の音と聴く。

再び目覚めて彼はトムと縷々人生を語る。ある時は真剣に、ある時は滑稽にまた皮肉に。

「僕たちは皆同じさ。男は十四の部屋を持つ家だ。寝室で男は知的な妻と眠る。居間では馬鹿娘と転げ回る。書斎で税金を払う。庭でトマトを育て、地下室で全てを吹き飛ばす爆弾を作る。皆同じだ」<sup>48</sup>

自分で創業した保険会社の役員会がスキャンダルのためにライマンに辞任を勧めるというトムのもたらした情報に彼は怒り、対立する次期のボスのスキャンダルをあげつらうなど、現在彼が身を置くビジネスマンの競争社会を大変リアルに描き出す。

しかし妻シオドーラが娘とともに床側に登場すると、男の強気はたちまち失せ、妻の沈黙に脅えるライマンの意識のベクトルは過去へ、過去へと向かって行く。50万年前の甲殻類が白い寺院の壁のように立ち上がってくる化石で一杯のライムストーンの壁の側の川で、蛙のように浮き漂った若い二人、そこから二人はなんと遠く漂ってきたことか。

「ではそれを何と呼ぶのかな。君の幸せが基づいている虚しさを僕が知っていながら君の無邪気な満足した顔を覗き込まねばならないことを。それは苦悩ではないか？」<sup>49</sup>

というライマンは、テオとの対話の切れ目もなく、病院のパジャマのままであるが、このとき舞台はすでに9年前のサファリへの家族旅行に移っている。

巨大な、こだまするライオンの唸り声が劇場を押し、サファリ・ジャケットを身につけ双眼鏡でライオンを遠く観察しているベシーに照明があたる。ライオンの生態や、ひいては人間の夫一婦制にまで及ぶ屈託ない親娘三人の話の中に、突然ライオンの巨大な咆吼が間近に聞こえ、ガイドの警告にも従わず独り踏み止まったライマンは、近くに迫った野獣を睨み据え、恐怖の極限で怒鳴る。

「俺は幸せだ！ シオドーラと結婚し、バスを持ち・・・そう、そしてリアもだ！ 俺は山のような財産を作った。そう、そしてやりかけの訴訟もない！ 信じないものに何時の日か犠牲を払うこともない——一夫一婦制を含めて——そう、俺は生活を愛する、ライオンめ、俺とお前の両方の生活を！」<sup>98</sup>

高揚したこの現世礼讃の叫びは、おそらくこのドラマのクライマックスである。そしてこのかぎりなく強く逞しいマスキュリニティの宣言に共感して、ライオンの猛々しい咆吼はむしろ同類に向けるように緩和される。女性から見れば身勝手な俗物的にさえ見えるこの男性にこそ、劇作家が象徴せんとした意図があると思われる。勝ち誇って妻子の元に戻ったライマンは、この事件を契機によいよ自分の選び取った人生に自信を持つ。

「今は未来全てが明らかになった。我々は恥ずかしげに中年後半ににじり寄るのではない。我々は進行してゆくのだ、頭を掲げて」<sup>99</sup>

カリブ海に自分だけの小さな家を建て、そこを読み終えることのない厚い英国小説で一杯にし、買い物のための二台の自転車を買って・・・そんな明るい生活設計にひたすら喜ぶ妻をよそに、ライマンの想念はサファリ旅行と全く同じ時期の、即ち9年前のリアの妊娠に移行してゆく。中絶に行こうとするリアを説得してライマンは、かつての自分の過ちのためそれと名乗れなかった息子とのパンナムの待合室での17年後の出会いを、深い心の痛みとして語る。離婚を確約し、リアの出産を懇願したライマンは、しかし勇気のなさのためにそれを果たせなかった。何も知らない妻の愛情表現に離婚を申し出る機会を失ったのであった。彼の重婚は悪辣さのためでなくむしろ心優しさのためであったと納得させる告白でもあった。

#### (4)

第二幕の後半では、前半のシオドーラとの対話と対置して、リアとの長い場面がある。その中に挿入される過去の場では、リアの妊娠二ヵ月のとき彼女と宿泊したニューヨークのホテルと、そこからさほど遠くない自宅とで、一晚に二度ライマンは二人の女性と愛し合うが、彼女たちがそれぞれ幸福になるにつれ彼は悲嘆に沈み、その原因を「この忌まわしい客観性」<sup>100</sup>のためと納得する。幸せな人を見ると神が哀しみを感じるように、自分は彼女たちから一步退いて観る己を持っているからと自覚するのであるが、路上のリアと別れて見上げる窓辺のシオドーラのもとへ赴くとき、彼は罪の自覚の恐怖のために空を打ち顔を被い齒軋りして自分を励まさざるをえない。

「この罪と共に地獄行きだ！」<sup>101</sup>

散文のリアリズムは、個人の、そしてプライベートな生活の言語である。ライマンは常にこのリアリズムで二人の女性に向かっているが、女たちは少しずつニュアンスの異なる言語を用いる。シオドーラのセリフは教養の裏打ちを持ち、ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』

やエドワード・ホッパーなどの話題が現れ、その言葉もやや生硬である。リアの用語はより本能的で、息子ベンジャミンの認知や経済的安定を要求するなど、直截で自然な言葉を話す。そしてライマンの意識が漂い、地の会話のまっただなかで挿入される独白では、しばしば詩的な言葉の奔流が訪れる。枠組みとしては現代的な妥当性を持っているこの作品が、リアリストとしてではなく詩的表現主義者の作として受け入れられるのは、時間的に重層した構成とともに主人公の意識の流れの変化に応じた言葉の多様性によるところが大きいと思う。

白昼夢で現前したサファリでのクライマックスの後、ライマンをめぐる女たちの混迷はなおも続くが、ライマンの身の上は急坂を転がるように破局に向かう。まずリアは息子ベニーを楯にとってライマンに復讐しようとし、ベシーは母シオドーラが階下のホールで発作を起こしたと知らせにやってきて父に敵意の目を向け、さらに後から現れる当のシオドーラもこれまでの教養とソフィスティケーションの殻を脱ぎ捨てるように、スカートをはかない裸のものをコートの開きからあらわにして卑猥な言葉を大真面目で連発する。そしてこんな言葉を吐き捨てる。

「社会主義は死んだわ、キリスト教は終わったわ。だから・・・もう何も残らない、単純さ以外にはね」<sup>20</sup>

おそらくこれは80年代後半のミラーの本音でもあったろうか。殉ずるべき主義は失せ、神もその力を失ったこの時代、ライマンの継るべきものはただ自分の欲望しかなかった。それに従って富も名声も満ち足りた物質生活も手に入れた彼は、妻と娘の安定した家庭生活と、愛人と息子から成る情事の刺激と変化によって、愛情の面でも常人の二倍充足した精神生活を営んでいた。妻には満ちたりたよい生活を、愛人には事後の孤独なシャワー、あてもない枕言葉、心ないコンドームの箱からの救済を与え得たと信じていた。モーガン山を下る事故で、それまで個別に完結していた二つの世界が重なり合い激突したことで、ライマンのそれまで意識の下に押し込められていた道徳的なディレンマがあらわになる。

「君たちを愛している！ 君たち皆素晴らしい！」<sup>21</sup> という言葉は依然としてライマンの本心であるとしても、ベシーの「殺されても当然よ、パパなんか！」<sup>22</sup> という、涙とともに迸り出る言葉は、登場人物全ての存在の闇を浮き彫りにする。事実重婚状態のこの十年、保険会社の役員室で「埋められた死体」<sup>23</sup>であったと自覚するライマンは、それでも「私の惨めな暗い片隅で、私はまだなぜ自分が罰せられるのかわからない」<sup>24</sup>のである。

自分の人生に耐えられないライマンをあるがままに受け入れるリアに対し、そのためだけに相手の勝利を認めるシオドーラも、最後には夫を去って行く。最後まで彼が離婚を実行しなかったことでライマンの妻への評価を確認するリアも、トムに促されるまでもなくライマンを去って行く。トムもまたライマンへの友情を洩らしながらも、シオドーラとともに立ち去る。

「なぜ良心を持つことが責任逃れなんだ？ 君は恥じているんだろう？ なぜそれを認めることができない？ 良心は人間的じゃないのか？」<sup>25</sup>

という非難の言葉を残して。

二つの家族と竹馬の友に見放され、「宇宙の迷い子」<sup>⑧</sup>になったライマンを看取るのは、黒人看護婦（下線・筆者）のみである。アメリカ社会にあって虐げられた民族にこそ他の痛みが分かることを、ミラーは言うのであろう。

「女性の暖かみは最後の神聖さだ、太陽の一部だ、最後の魔法だ」<sup>⑨</sup>

と言いつつライマンは彼女に縋ろうとする。が、こんな女性賛美は単なる言葉の上だけで、彼のモラル・ディレンマは癒されるべくもない。むしろこの大仰な言い回しの空疎さは茶番に聞こえ、過去の彼の処世術の愚かさを浮き彫りにするだけである。ローガン看護婦はライマンに向かって夫と息子と共に楽しむアイス・フィッシングのことや中古で手に入れた買い得の靴のことを話題に持ち出すが、こんな平凡さのなかの凡人の幸せを、ライマンは封じられてしまっている。全てを欲し両手の花にも満足を与えようとしたライマンは、その貪欲と驕慢のために孤独という新しい悪魔の手に引き渡されたのだ。家族から個人へという時代の価値観の変遷も、ここには痛切に感じられる。

全ての術策が潰え暗黒の満ちるところにライマンは落涙するが、「わけもなく」<sup>⑩</sup>与えられたローガンのキスという僅かな暖かみを手掛かりに、彼は雄々しく自分を取り戻し、平凡人の平凡な幸せに想像を走らせ、「自制心ある苦悩」<sup>⑪</sup>でもってじっと前方をみつめる。まことにライマンは、80年代のヤッピーを代表しつつ60年代のヒッピーの精神を固持し続ける。アメリカン・ドリームは彼の中になおも価値を持ち続ける。夢に固執しつづけることが罪であるというのなら、孤独という罰をも甘んじて受け、それに耐え抜こうとする苦悩の天才がここにも一人誕生した。アーサー・ミラーはウィリー・ローマンに肩を並べるアメリカン・ライフの代表的人物ライマン・フェルトを、『セールスマン』の四十年後にみごとに創造し得たと言ってよかろう。そして善意のために血を流し、そのために行為の非を問われて世界の孤児となったベトナム戦争後のアメリカを、ライマンの中に見るミラーの、皮肉と愛情のこもごも籠るまなざしを、観客は感じるのである。

#### 注

- (1) Christopher Bigsby ed.: *Arthur Miller and Company*, 1990, Methen, London.
- (2) Arthur Miller: *Ride Down Mt. Morgan*, 1992, Penguin Books, New York.
- (3) Time, Nov. 11, 1991, etc.  
'Miller's new work contains ohe inimitable tbservations of one of the greatest chroniclers of American life.'  
'Miller is writing with all the vigor and agility of the commercial theater at its most irresistible.'  
'The epochal event will be *The Ride Down Mt. Morgan* — and Arthur Miller's stubborn climb back up to the pinnacle of his talent.'
- (4) Arthur Miller: Op. cit., Staging Note;  
The play veers from the farcical to the tragic and back again. . .

- (5) Ibid., p.25.  
 . . . how about bigamy insurance? Might call it the Desertion Protection Plan.
- (6) Ibid., p.29.  
 I've always relied on her sense of reality, especially her insights into this country. But I just don't want to cheat anymore it's gotten hateful to me, all deception has. It's become my Nazi, my worst horror—I want to wear my own face on my face till I die.
- (7) Ibid., p.30.  
 I keep thinking of my father—how connected he was to his life; couldn't wait to open the store every morning and happily count the pickles, rearranging the olive barrels. People like that knew the main thing.
- (8) Ibid., p.49.  
 Well, insurance is basically comical, isn't it? —at least pathetic. . . .  
 You're buying immortality, aren't you? —reaching up out of the grave to pay the bills, remind people of your love?
- (9) Ibid., p.50.  
 It's funny; my generation got married to show its maturity, yours stays single for the same reason.
- (10) Ibid., p.52.  
 And the source of all my conflicts. In the Jewish heart is a lawyer and a judge, in the Albanian a bandit defying the government with a knife.
- (11) Ibid.  
 There's something venerable in your eyes. Not old—ancient. Like our people.
- (12) Ibid., p.55.  
 We're all in a cave. . . It's dark in here, as dark as sleep, and each one moves blindly, searching for another; to touch, hoping to touch and afraid; and hoping, and afraid.
- (13) Ibid., p.56.  
 THEO: *quietly to Tom, mystified*: What did he say?
- (14) Ibid., p.64.  
 — he tried to kill me once.
- (15) Ibid., p.70.  
 . . . something menacing about their deathly stillness as the sepulchral dreamlight finds them. . .
- (16) Ibid., p.81.  
 Look, we're the same; a man is as fourteen-room house—in the bedroom he's asleep with his intelligent wife, in the living room he's rolling around with some bare-ass girl, in the library he's paying his taxes, in the yard he's raising tomatoes, and in the cellar he's making a bomb to blow it all up.
- (17) Ibid., p.94.  
 What would you call it, then—having to look into your innocent, contended faces, when I knew the hollowness your happiness was based on? That isn't suffering?
- (18) Ibid., p.99.  
 I *am* happy, yes! That I'm married to Theodora and have Bessie. . . yes, *and Lear, too!* . . . I've made a mountain of money . . . yes, and have no suspending lawsuits! . . . And that I don't sacrifice one day to things I don't believe in—and that includes monogamy, yes!—We love our lives, you goddam lion!—you and me both!
- (19) Ibid., p.101.

The whole future is clear to me now ! We are not going to sidle shamefully into our late middle age, we're marching in heads up !

(20) Ibid., p.117.

It's this damned *objectivity* !

(21) Ibid., p.118.

To hell with this guilt !

(22) Ibid., p.128.

Socialism is dead. *A beat*. And Christianity is finished, so . . . there is really nothing left to . . . to . . . Except simplicity ? To defend ?

(23) Ibid., p.133.

I love you, Bessie ?— all of you! You are all magnificent !

(24) Ibid.

You ought to be killed !

(25) Ibid., p.138.

I was a corpse buried in that room. . .

(26) Ibid., pp.138—39.

In some miserable dark corner of my soul I'm still not sure why I'm condemned !

(27) Ibid., p.134.

Why is it a cop-out to have a conscience ? You were ashamed, weren't you ? Why can't you acknowledge that ? Isn't a conscience human ?

(28) Cf. Ibid., p.140.

He sees that Lyman is lost in space, and he goes out.

(29) Ibid.

A woman's warmth is the last sacredness ; you're the piece of the sun. The last magic.

(30) Cf. Ibid., p.141.

LYMAN : Why'd you do that ?

NURSE : No reason.

(31) Ibid., p.142.

. . . with a contained suffering. . .

(かわの みちこ 英文学科)

1996年10月16日受理